

人と離れて・心は寄せて －失語症会話パートナー・コロナ状況下での模索－

失語症会話パートナー世田谷区連絡会（世パネット）

暉峻 由紀子、橋口 直子、服部 きよみ、森 千栄子、横井 美代子

（失語症 自主グループ 失語症会話パートナー）

1. はじめに

失語症は、ある日突然、脳卒中や頭のケガにより、脳の言語中枢が傷ついて起こる言語障害です。全国で50万人といわれています。医療での治療、リハビリを終えると地域での生活がはじまりますが、言語障害を持つ失語症者が地域で集まる場は少ないところから、世田谷区では1997年から失語症自主グループの活動が始まりました。

自主グループ発足当初から、会話の手助けをするボランティアが参加していました。2005年に、区は失語症に対する知識とスキルを持ったボランティアとして、失語症会話パートナーの養成を始めました。失語症者と活動を共にする失語症会話パートナー有志の会が「失語症会話パートナー世田谷連絡会」（世パネット）です。

現在では12の自主グループがありますが、3月から公共施設が閉鎖になり、グループ活動は停止を余儀なくされました。コロナ状況下における失語症の方たちと会話パートナーの交流の模索を報告します。

2. 取り組み

自主グループは、公共施設を利用して開催されるため、3月の施設の閉鎖イコール活動停止となりました。それ以降のコロナ状況下での失語症者と会話パートナーの交流の記録を3期に分けて報告します。

（1）休会期（3月～6月）

思いがけない4か月にわたる活動停止の期間は、基礎疾患を持つ失語症の方たちの体調、家でのお籠りの時期をどう過ごされているか、心配がつなりました。定期的に集えない中で、会話パートナーはなんとかコミュニケーションを維持しようと活動を続けました。

（2）再開に向けての準備期間（6月）

5月25日に緊急事態宣言が解除されましたが、6月15日まで地域の施設は開放されませんでした。6月中旬には、多くの自主グループが利用する総合福祉センター後利用施設は7月1日利用開始と決まりました。この再開日程をきっかけとして、再開に向け「コロナ感染防止対策講座」（保健センター主催）を受講し、失語症者向け感染防止のチラシの作成、再開希望の意思確認を各グループ毎に行いました。このやりとりで、再開を希望する失語症の方、会話パートナー、それぞれのコロナに対する思いを率直に聞き合えたことは次へのステップを考えるヒントとなりました。

（3）再開後の活動（7月～10月）

各グループの慎重な判断を経て、7月再開は12グループ中5グループでした。利用施設の対応を確認し、事前の施設側の防止対策、参加者各自の参加時の注意事項等を文書にして郵送、当日に備えました。

社協の「いきいきふれあいサロン」登録のグループへは、再開当日に担当職員が参加、適切なアドバイスがあり、安心しての再開となりました。

(4) 長期休会グループの活動

10月になり再開は9グループとなりましたが、再開できない3グループは、電話、ライン、往復はがき等での通信を続けています。長期休会を選んだ人には、例会通信を送ることで関係を保っています。

3. 私たちが学んだこと

失語症の方との間接的なやり取りには困難が伴うことを再認識。ハガキ、文書等の文字を使っての意思確認は果たしてご本人の意思が正確に反映しているのか、電話でのやりとりで意思の伝達が正確に行われるものなのか、ご本人と直接やりとりが出来ない場合、ご家族との話になるが、それでご本人の意思確認として良いのか等、確信の持てないことも多々あり、失語症者への手助けの困難さが改めて思いやられました。それだけに対面しての出会いの大しさを再確認しました。

また、会話パートナーがボランティアだということが大きなメリットである事がこの緊急事態で分かりました。ご本人、ご家族、会話パートナー同士の連絡を各自主グループの自主的な判断で行え、各グループ、参加者の自主性を尊重出来たことは貴重な収穫です。



発表者

4. 考察と今後の課題

withコロナでの会話補助技術の確立／感染者が発生した場合の対応と責任／長期休会者との関わり。

そして徒歩圏に集いの場を設けることが大きな課題です。再開がスムーズに行われたグループの特徴は、徒歩圏に集える場がある事から、交通機関を使わずに通える範囲に集える場がある事が今後も続くであろうコロナ状況下では必須と思われます。

~~~~~

<助言者コメント>

橋本 瞳子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局長）

.....

失語症の方の不自由さは、人それぞれであり、コミュニケーションにはその方にあった「聞く、話す、読む、書く」の工夫が必要であることがわかります。失語症会話パートナーの活動は、そのためには個別性が高く、専門性が求められる活動ですね。

コロナ禍でも活動を止めないことをかけて、様々な工夫をされています。利用者のために「コロナ感染防止対策講座」を受けられて、利用者に向けても発信されたのは、「怖がりすぎず正しく恐れるため」にも、とても大切なことだと思います。

はがきや通信の発行では、イラストをたくさん使用し可視化され、返事がしやすい質問形式を取り入れています。その中で手紙やメール、電話等、間接的なやり取りの難しさを今後の課題とされています。会話補助技術の確立や徒歩圏内のグループ結成などを提案されており、活動への熱意を感じました。孤立しやすい失語症者にとってコロナ禍は、それを増幅しかねません。失語症会話パートナーの繋がるための活動は、皆さんの支えになっていると思いました。